

---

# 皇帝陛下は超ヘタレ

ティシー

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

皇帝陛下は超ヘタレ

### 【Zコード】

Z0808P

### 【作者名】

ティシー

### 【あらすじ】

突然異世界召喚させられ、最強の力を得た俺は…へ、ヘタレになつた！

…冷笑の皇帝？バカ言つな！緊張し過ぎて限界が来ると顔の筋肉が引き攣るだけだ！

…最強の君主？側近のラミュが裏で全部仕切つてるだけだ！

…整い過ぎた顔に甘い声？それは昔からよく言われる…！

周囲から猛烈な勘違いを受け、ただのヘタレは何故か最強の皇帝と

なる。

連載小説名で作った「ファンタジー短編集」へ、この小説を含む全短編小説を移動しました。（2）も短編集に置いてあります。

(前書き)

ま、またまた短編…。いやでもホント、突然浮かんで書きたくなつ  
ちやうんです！

連載小説名で作った「ファンタジー短編集」へ、この小説を含む  
全短編小説を移動しました。（2）も短編集に置いてあります。

強大な力を誇る大帝国・バージリー＝帝国。そして突如君臨した最強にして冷笑の皇帝・レイド。見た目は少女、中身は腹黒魔女・ラミュクリーゼ。一人がタッグを組んだ時、ヘタレは最強となる

「レイド陛下。本日は二国協議がござります」

「分かつた」

皆が息を呑む美しさ。漆黒の髪と切れ目の瞳、低く響く声に、整い過ぎて冷たさを感じさせる容姿は、神が与えたものだろうと専ら尊くなっている。

噂はそれだけではない。

長い歴史を誇るバージリー＝帝国で、伝説の英雄とされるレド・ルースの生まれ変わりであるといつてや、一人で国一つを滅ぼしたなど様々だ。

臣下は絶対の信頼を寄せてついていく。まさに理想の皇帝。

・  
・  
・

「 とわが国は思う。…レイド殿、それどころしいかな？」

「 異存はない」

「 レイド殿、一度わが国へ参らんか？ 素晴らしいダイヤが出てきて

…

「 そういうことは側近に任している。話はラミュクリーゼとして  
くれ」

「 そ、そうだな。失礼した」

三国の王であるレイド、ジェネバ、ガーセは月に一度行われる三国協議を行っていたが、ジェネバもガーセも、三人の中で一番若いはずのレイドの機嫌を伺っていた。

「 そろそろ終わりでいいか？」

それまで無表情だったレイドが微笑する。いや、ジェネバとガーセには絶対零度の笑みに見えたのだろう。一人は慌てて席を立つ。

「 ではまた」

颯爽と臣下を引き連れて過ぎ去る後ろ姿は、圧倒的な風格に溢れており、逆らう事を許さない雰囲気を醸し出していた。

・ · ·

「 あ、～！緊張した！！死ぬかと思った！腹つ、腹緩い！どうじょ

「ラミコー！」

「つるさい**澪斗**。トイレへ行けばいいだの！」

「やうだなつ、やうするー！」

日常的となつた澪斗との騒がしい会話。いや、澪斗が勝手に騒いでいるだけだが。

「ラミコクリーゼしか知らない皇帝の秘密。それは、澪斗が異世界人で、超ヘタレということだ。

時遡ること半年前。突然前皇帝が姿を消し、臣下達は混乱に陥つた。そんな中、上級の召喚術と能力を開花させる力を持つラミコクリーゼはある一室で異世界からの召喚を試みた。

「【私は容姿と力を備えた英雄の召喚を望む】」

異世界からの召喚なんて、長い時を生きているラミコクリーゼも初めてで、面白半分でやつたことだったが、現れた者は20代前半の容姿端麗な男。

開かれた瞳と視線が合わさつた時、ラミコクリーゼは一瞬魅入つてしまつた。そして我に返ると氣を取り直して膝をつく。

「お待ちしておりました、選ばれし新たな皇帝よ。我が名はラミコクリーゼ。貴方様の右腕となる者でござります」

とりあえず、数秒待つ。しかし何の返答もない。失礼かと思った

が頭を上げてみる。…後悔した。冷たく光る瞳が、自分を見下ろしていた。

だがここで引き下がるわけにもいかない。もつ召喚は完了してしまったのだ。

「失礼かと思いますが、お名前をお聞きしてもよろしいでしょうか」

次期皇帝と皿を合わせながら、内心の動搖を微塵にも出さず堂々と言い放つ。すると、少し経つた後。

「…澪斗」

低く、しかしじこか甘く響く声が聞こえた。ラミュクリーゼは歓喜に震えた。この者に仕えれることを、この者の力を今から引き出せることを。

「澪斗様。貴方様は神に選ばれし方でござります。その貴方様の偉大なる力を、私が開放させていただいてもよろしいでしょうか？」

「……ああ」

「では失礼します」

そう言つと、澪斗の額に触れる。少し揺れた澪斗の体だったが、それから微動だにしなかつた。そのことにラミュクリーゼは感心した。

ラミュクリーゼが額に触れたまま何かを呟く。すると澪斗の体から力が進る。

「なつ、なんだ！？」

皇帝に相応しい容姿、圧倒的な力、風格、ここまでは完璧だった。

ルルメドセ

「零斗様の魔術を開放させていただきました。イメージしていただければ魔法を放てます」

「はい？ 魔法？…………うお

はい、魔道……うお、なんか似たが。  
何、何で

ここからが、ラミコクリーゼの苦難の始まりだつた。なんだかいきなり豹変したように思える次期皇帝。

「落ち着いてください。貴方様の力は強大故

しかしその後は続かなかつた。  
窓から澪斗が巨大な魔法を放つたのである。それもガーセが統べる国の城に向かつて。

ドゴオオオオソンン...

け  
で  
す

「たかが！？え、でもこれ、あれじゃない？開戦とか…」

後処理は任せてくれださー

「奄 奄刃刑とかなんな」

「やばくないです。大丈夫です」

「本当に……？」

「本当にです」

ラミュクリーゼは密かに頭を抑えた。

確かに無理矢理能力を目覚めさせると性格が変わることはある。何故なら奥底に眠っている力を引き出す過程で、余計なものまで引つ張つてくることがあるからだ。

しかしさかだ、まさかこのクールな姿勢で、ヘタレも目覚めるとは…ラミュクリーゼも予想していなかつた。

「とりあえず、澪斗様には本日より新皇帝となつていただきます」

「え、ムリムリムリムリ」

「もう決ました事ですので、さあこちらへ」

「ムリムリムリムリ。俺難しいこと分かんない」

「大丈夫です。貴方様の無表情の顔でそれらしき」とを言つておけば大抵騙されます

「何！？何を騙すの！？？」

「私以外の全員を。皇帝がヘタ…失礼、不慣れな態度ですと臣下にも影響を与えますので、貴方様は凜とした表情を保つてください。よろしいですか？」

「ぜ、善処しまっス！」

ラミュクリーゼは決意した。自分が裏の帝王となるべく。このヘタレには任せれない。

「ではこれから臣下どもが入ってきますので、澪斗様は堂々どい」自分の名と、新たな皇帝であることを告げてください

「ムリムリムリムリ…なんて…なんて言えばいいつ…？あ～

トイレ！腹イテホー！

「…では『我が新皇帝・燐斗である。逆りこし者には死を下す』」

んな感じで

「えええええ！…？」

「良いですね？失敗は許されませんよ」

「も、もし失敗したら？」

「追い出されることになるでしょうな」

「えええええ！」

「さあそろそろですよ。あとこの部屋以外で叫ばないでくださいね。この部屋は防音ですから」

内心//コクリーぜまとも不安だった。だが…

「俺が新皇帝・燐斗だ」

無表情のまま、全てを平伏させるような声色で燐斗が言い放つ。

「逆りこし者には

「

そこまで言いつと燐斗が微笑む。その表情に、//コクリーぜを含む臣下全員が見惚れ、同時に背中に走る冷やりとした感覚を感じた。

「燐斗様、素晴らしいです。反対なんて一人も出ませんでしたよ。あの続きを言わなかつたのも正解でしたね」

「…」

「燐斗様？」

「ラミュ、だつけ…」

「はい。ラミュクリーゼでござります。お好きなところお呼びください」

「ラミュ。ヤバイ。泣かせつ

「はい？」

「ト、トイレ…！」

「…」

数分後

「いやあ～スッキリしたあ～！」

「はああ…幻想？さつきのは幻想なの？」

「あ、そういうやさつきは「めんな！最後まで言わなくて！」

「いえ、先程申しましたように、あそこで止めて良かつたかと思いません」

「そう？良かつたあ～…いやもうただでさえ緊張で筋肉動かないのに言葉発したら限界来ちゃつてああなっちゃつた」

ああなつた、とは冷笑のことであらうか？…といつゝとほ、無表情も冷笑も言葉を切つたのも、全て緊張の所為？

言わなかつたのではなく、言えなかつた？無表情を作つてたのではなくて、笑顔を作れなかつた？で、限界が来た結果、冷笑…？

わ、笑えねえ！…大丈夫か！？これで？！」の先やつていけるか！？

いやでも、裏で上手く操作すれば…。そうだ、私がしつかりしていれば問題ない。本人は緊張すると自動無表情機になるみたいだし。幸いこの顔で、威圧感は本人がピンチになると出るみたいだし、基本無口で、冷笑は終わりの合図という暗黙の了解を作れば…美形で、冷酷な皇帝の出来上がり！…いける！ハズ。

・・・

それから半年。ラミコクリーゼが願ったとおりの理想の皇帝像が噂で広まり、他国は澪斗の力を相当重く見たらしくこいつの意のままであった。

「なあなあラミコ～！」

「何？」

「あの三国なんぢゃら無くせなーい？」

「ムリ」

「即答オ！？」

「当たり前だ。いいじゃん別に。座つて相槌打つてるだけじゃん」

「違え！あの一人の威圧感すごいんだぞ！？」

「澪斗の方が威圧感すごいと思つけど…」

「え？なんか言つた？」

「いや？単にヘタレだなつて思つただけ」

「ラミコつて酷いよなあ！？見た目天使っぽいくせに中身悪魔だろ！」

「澪斗のが酷いよ？理想を裏切るという意味で。失望感半端ないか

「うね、そのへタレ。ホントに人は見かけによりなこよね  
「つづせ。好きでへタレなわけじやねエ」

「へタレは認めるのか。

澪斗がこの世界へ来て三日目から私は澪斗と二人の時は敬語を使わなくなつた。澪斗もそれを望んだし、私も面倒臭かつたし。こんな頼りない皇帝はどこを探してもコイツしかいないだらう。

「あ、澪斗。見合の話来てたよ」

「はあ！？」

「まあ当たり前だよね。むしろ遅いくらい。どうある？」「いやいやどうするもこうするも俺ヤだよ」

「多分これかうりでソーデン来るよ」

「マジで？」

「マジで。どうする？ 適当に王妃作っちゃう？」

「何その適当。俺の正体バレていーの？」

「ううんダメ。誰か一人にでもバレたら生涯終わると思つた方がいいよ」

「俺おまえに会つた時点で人生終わつてるんじや

「なにか？」

「いえなにも

「あ、私と結婚する？」

「は？」

「うん、この方法もアリだね」

「全然アリじやねエよ。妻に尻敷かれるのは流石に避けたいんだけど」

「誰と結婚してもそのへタレじや未来は見えてるんじや……？」

「……」

新たな皇帝が君臨してから早半年。  
致命的な秘密を持つ皇帝によってはそれでも日々を一生懸命に生き  
てこる。

「アリ…ヘタレな皇帝とお嬢のことで…」  
「ぬーーー！」

(後書き)

ありがとうございました！

なんか変なシリーズが増えていきそうな…。

今度澪斗視点を書くような書かないような。あ、澪斗の「斗」が「ど」ってムリじゃね！？とか寛大なお心でスルーをお願いしますw

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0808p/>

皇帝陛下は超ヘタレ

2011年5月27日19時05分発行